
流星のごとく

コバルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のごとく

【Nコード】

N0073I

【作者名】

コバルト

【あらすじ】

この物語は地球を3度も救った少年星河スバルと同じく地球を救ったウィザードのウォーロックとその仲間たちの物語である。

プロローグ

この物語は地球を3度も救った少年スバルと、

前まではFM星人で今となったウィザードのウォーロックと

その周りにいる仲間達の楽しい日々の物語である。

「おい、スバル！ 朝だ、起きろ」

ウォーロックはスバルを起こそうとしている。

「クソ、なんで俺が毎日毎日こいつを起こさなきゃ

いけないんだよ……。 だいたい、俺はウィザードであつても

寝てる人を起こす目覚まし時計でもなければ便利な何でも屋さんでも

ねえんだぞ！！

早く起き上がれスバル！」

ウォーロックは独り言を長々と話していた。

「うーん、よく寝たーあ」

スバルはホントによく寝たようで、起きてからもあくびをしなかった。

「おい、早くしたくしないと学校遅れるぞ」

「わかってるよ、今日は転校生が来るんだよ」

そう、今日はコダマ小に転校生が来るのだ。

省

略

「じゃあ、父さん、母さん行ってきます。」

「気を付けていくのよ」

「おう、行つてきな」

あかねと大吾は明るくスバルを見送った。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします。

意外な転校生

「おはよう、みんな」

スバルは後ろで固まっている白銀ルナと牛島ゴン太と最小院キザマ口に挨拶をした。

「よう、スバル」

「おはよう、スバル君」

「遅いわよ、あと2分たったら遅刻よ」

ゴン太とキザマ口は挨拶をしたが、ルナはいつもどおりお説教をした。

「転校生は一体どんなやつだろう……、
なあ、委員長どんな奴かしらねえか？」

「私も知らないわ」

「僕も気になります、なにせ今日の転校生は
1人だけじゃないんですからね……」

「うん僕も正直気になるよ」

「俺は全然気になんかなんねえがな」

ゴン太、ルナ、キザマ口、スバル、そして

前はディーラーという組織の仲間だったが今となっては同じクラスメイトのジャックの順番に言った。

キンコーンカーンコーン

そんなことを言っているうちにかねが鳴った。

教室にこのクラスの担任の育田が入ってきた。

「おい、皆席に座れ！」

そう育田が言くと皆、席に座った。

「よし、じゃあ白銀、号令を」

「わかりました……………起立！」

「……………れい、おはようございます」

ルナは皆が立ったことを確認するといつものように
号令を済ませた。

「「「「「おはようございます」「」「」」」」

それにこたえるようにルナ以外のクラス全員が
いつものように号令を済ませた。

「よし、じゃあ皆席に座れ、今日は転校生が来ている、
このクラスに2人入るけれど皆仲良くしろよ、
じゃあ、一人ずつ入ってきて自己紹介してくれ」

ガラガラ

ドアが開いて一人の少年が入ってきた。
その少年は赤い眼の緑色の髪の子が入ってきた。
その少年はかつては同じクラスメイトだったが自分のもう一人の
人格を

封印するために旅に出してしまった人で、ジェミニ・スパークに電波
変換でき、

ロックマンと互角に戦えるほどの子だった。

その少年は……………、

「双葉ツカサです、っていうかただいま。これからよろしく」

「「「「「おーおどこいつてたんだよ」「」「」」」」

クラスの皆がそろえて口に出した。

「よし、双葉席はどこがいい？」

「じゃあ、スバル君から見て左の席にして下さい」

「わかった、星川いいかな？」

「はい、いいです」

ツカサはスバルの左の席に歩いて行った。

「ツカサ君……、どこ行ってたの？」

スバルは左の席のツカサに聞いた。

「ヒカル封印の旅だよ……、苦労したけどなんとか自分でコントロールできるようになったよ。そのヒカルは今ジェミニと一心同体みたいな感じだよ」

「そうなんだ、それじゃあツカサ君、僕とブラザーになろうよ」

「よろこんで、こちらこそよろしく」

ツカサは本日最大の笑みになった。

「ありがとう、スバル君とブラザーになれてとてもうれしいよ」

「僕もだよ、ツカサ君」

2人が会話してるうちに育田が話を先に進めていた。

「よし、じゃあ次、自己紹介してくれ」

育田がそう言っただけで教室のドアの開く音がした。

「あ、育田先生の話全然聞いてなかった」

「僕も……どんな人だろう」

スバル、ツカサの順に呟いた。

教室に入ってきたのはピンクの髪の色でエメラルドグリーンの眼の可愛い

少女だった。その少女は地球の危機と一緒に戦ってくれていてウィザードだが

かつてFM星人だったハープと一緒に行動している。そして、電波変換ができハープノートにもなれるシンガーソングライター。

「響ミソラです、みんなよろしくね」

皆、啞然となっていた。

（テレビで見ているても可愛いのに眼の前で見ると……メチャクチャ可愛い）

男性人は、ほぼ皆こんな事を考えていた。ただ、スバルは違った。

（・・・なんでミソラちゃんがここにいるの・・・、別にいてはいけないという

意味ではないけどここにいてのがわからない、なんで、なんで、なんで？）

スバルは？マークが頭の上に沢山浮き出していた。

「・・・・・・・・どこが可愛いんだよ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジャックが小さい声で独り言をしていた。だがいくら小さい声でも周囲には聞こえていた。ジャックは独り言をしていたが周りに男子の殺気に

あふれた視線を感じ黙った。

「いつみても可愛いですね、ミソラちゃんは」

「おう、俺たちはあったことがあるといってもやっぱり可愛いぜ、それが俺達のクラスに入るんだからすんげーうれしいぜ」

キザマロ、ゴン太の順に言った。

「よし、じゃあ響席はどこがいい？」

育田がミソラに言った。

（俺の隣に来てくれ）

（僕の隣に来て下さい大歓迎です）

（このあいだのコンサートの帰りサインをくれた仲だ！絶対俺の所に来る）

（神様、仏様どうか天のほどこしを……今こそ僕の隣にミソラちゃん
が来ますように神の祝福を）

（お願いだ、俺の一番大事なものをミソラちゃんにあげてもいいから俺の隣に……）

男子ほぼ全員がこんなことを考えていた。

（………ツケどこだっていいだろうがあいつの席なんて
俺の知ったことではねえよ）

こんどばかりは周りに聞こえては地獄を見る目に
合うと思ったので口に出さずにジャックは思った。

（うあが~~~~~、ハープのやろつか、……ウゲー想
像しただけで

毎日地獄だ！なんであいつがここにいるんだよ、どうかこの周囲
には来ないでくれ）

ウォーロックも殺気と欲にあふれた空気でも口に出すとヤバいと感じ
たせいか
なにも言わないでいた。

ゴン太もキザマロも自分の隣がいいと考えていた。

だが、そんな考えをしていた男性人とウォーロックの願いはかなわなかった。

「私、スバル君の隣に座りたいです」

スバルはこれから地獄を見ろと思った。

まずはミソラが言った言葉はNGが多いことだ。

まずはスバルの名前を知っていること、それに「君」を付けるといふことは

それなりに親しいということになる。

普通の場合は「あの人の隣がいい」ということになる。

もう一つは「隣に座りたい」だ。普通は「いい」となるがこれは親しさを強調していることになる。

そんなことを考えていた瞬間強い殺気を浴びているのを感じた。

その中でも一番強い殺気はルナだった。

ルナは、なにせロックマンのことが好きなため、そうなる

「スバル」ロックマン」なので、「ロックマンが好き」スバルが好き」となるわけだ。

（スバル……俺は恨むぞ）

男子の大半はこんなことを考えていた。

ゴン太とキザマロは何となく気は乗らないがあきらめていた。

ウォーロックは燃え尽きたかのように沈黙であった。

ジャックはこの場の空気とスバルとウォーロックの表情を見てゲラ

ゲラ笑っていた。

ヒカルも同様ゲラゲラ笑っていた。
ツカサはいつものようにニコニコしていた。

「よろしくね、スバル君」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「スバル君？」

「あ、うん、よろしく」

新学期そうそう大事件であった。

省

略

キンコンカンコン

「起立、令、さようなら」

「・・・・・・・・さようなら」「」「」

皆が礼をした後余っている体力を走力にかえて家まで猛ダッシュで帰った。

なぜなら他の男子にも捕まりたくはないが何しろルナだけには捕ま

りたくないからだ。

「もっと急げスバル！ハーブからは早く逃れたいんだ！」

ウォーロックが走っているスバルに言った。

「僕だってあの場からは早く出たかったよ」

そう言ってスバルは返答した。

「待つてよスバルく〜ん」

「おい、待てよスバル」

そう言って追いかけて来るのはミソラとジャックだった。

「待ちなさ〜い、スバル君」

ジャックとミソラの後ろ約20メートルの所にルナが追ってきていた。

「やばいぞ、スバル！委員長だ」

「うん、わかってるよ」

そう言って校門を出て逃げるため公園へ向かった。
それをジャックとミソラが追いかけた。

意外な転校生（後書き）

惜しい！

24時を過ぎる前には投稿しようと思ってましたが
25分過ぎてしまいました。
これからもよろしく願います。

今回は長かったですね、きっと普段はもっと短いと思います。

ウォーロックは猛反発しながらミソラに聞いた。

「まだ、小学生だし家も持っているわけじゃないから当分スバル君の家にいさせてもらうようにおばさんにたのんだらOKしてくれたから一緒に帰ろうって言ったのよ」

「……………そうなんだ」

「馬鹿野郎ー！！何が「そうなんだ」だよ！何納得しちゃってるんだよスバルー！！」

「いや、母さんがいいって言ったんだからしょうがないでしょ」

「ツチ」

「ポロポロロン、そうよウォーロック、いいじゃない一緒に」

「うがー、なんでハーブが出てくるんだよ！！来るなー！」

そう言っただけウォーロックはハンターVGの中に入った。

（母さんっては何を考えているのか全然理解できないよ、まったくなんでうちは居候がたくさんやってくるんだ？）

「……………あ、そうだ！忘れてた、ジャックの要件は？」

「ミソラと同じだ……………」

「ふえ？」

さすがのウォーロックも驚いたせいか棒読みで言った。

「うん、帰ろうスバル君」

「早く行こうぜスバル」

ミソラはスバルの手を、ジャックはスバルの背中を押すようにして行った。

「……あ、そうだジャック！クリンティア先生は？」

クリンティアとはジャックの姉のことだ。

「ああ、姉ちゃんは暁んとこいるぜ」

「……そうか」

「なぜだ？」

「いや、クリンティア先生元気かなあ〜と思ったし、それにジャックもクリンティア先生のところの方がいいんじゃないかな〜と
思っ
て」

「俺的には暁の野郎よりスバルのところの方が居心地いいと思った
からだ」

「そう」

そう言っ
て3人と2人のウィザードはスバルの家へ向かった。

スバルの所の居候（後書き）

今回はギリギリで次の日にならずに間に合いました。
現在は23時55分です。

ホントギリギリです。

後、居候の漢字が分からない人のために「いそろう」と読みます。
ジャックを書くのは難しいですね、苦労しました。
少しキャラ崩壊しているかも知れませんがお許し下さい。

スバルの家

公園から5分後家に着いた。

「母さん、ただいま」

「あらおかえりスバル、後ミソラちゃんとジャック君もおかえりなさい」

あかねはミソラとジャックがわが子のように普通に普通にふるまった。

「おじゃましま〜す」

「あら、お邪魔しますじゃなくてただいまでいいのよミソラちゃん、当分はうちが家なんだから、もちろんジャック君もね」

あかねはいつものようにニコニコしながら話した。

「あ・・・はい・・・ただいま」

ミソラは少し戸惑いながら入った。それはそうだ、いままで

「おじやます」とはいって来た家が急に「ただいま」に変わると普通は戸惑ってしまう。

「ああ、スバルの母さん、ただいま」

「はい、おかえりなさい、ジャック君」

だがジャックは自分の家かのように普通に普通に入っていた。

「スバル君先に2階上がってるね」

「俺も先に2階に上がってるぞ」

「うん、わかった」

スバルはミソラとジャックに返事をした後台所にいるあかねの方へ行った。

「母さんなんでぼくの家にもミソラちゃんとジャックが来ることを教えてくれなかったんだよ、そんなこと一言も聞いてないぞ」

「あら、言っただけ？」

「一言も言っただけ？」

「まあいいじゃない、困る事じゃ無いんだから」

あかねはニコニコして言った。

「まあいいけど……でも、来るなら来るって前もって言うてよね」

「はい、はい」

スバルはそう言ってジャックとミソラのもとへ二階に行った。

スバルの家（後書き）

今日はメチャクチャどうでもよくてメチャクチャ短くてすみません
>
<

何しろ今日はかなり眠くて2日連続徹夜みたいなもんなので勘弁して下さい。

明日は2作最低でも絶対に1作作ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073i/>

流星のごとく

2010年10月13日20時44分発行